

CAGLIERO¹¹

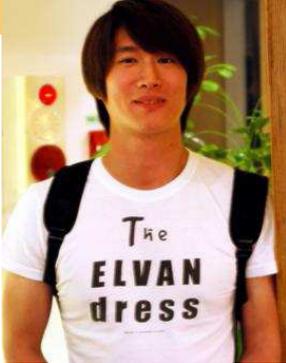
カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.39 - 2012年3月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



ミョン・フン



プロジェクト・ヨーロッパに貢献するには？

親 愛なるサレジオ会員の皆さん、サレジオ・ミッションの友人の皆さん、

ある韓国の若者の話を紹介しましょう。キリスト者の友人たちがイエスについて彼に語り、信仰の旅を一步一步、一緒に歩んでくれたこと、同時に彼の心の内に聖霊が働けるように自由を与えてくれたことが語られます。「僕の名前はミョン・フンです。僕はどちらかというと後ろ向きな人間でした。大きな夢もなければ、とても良いとは言えない生活態度でした。次々と起きた出来事によって、僕の人生に神様が働いておられることがわかります。一人の友人は何度もカトリック教会へ誘って来ていましたが、僕は気にとめませんでした。ある日、大学の食堂で、彼が食べる前に十字のしるしを切るのを見ました。その友人の仕草に僕はとても感動してしまい、その後は、未知の存在に「とらえられた」ようになり、教会に行かなければならないと感じました。ある日、バス停に

立っていると、ある映画の宣伝ポスターが目に入りました。友人が見に行くように勧めてくれていたもので、「トンジ、私のために泣かないで」という、スーダンの宣教師ヨハネ李神父についての映画でした。映画を見た後、心の中にたくさんを感じました。ヨハネ神父はなぜ人のために人生すべてを、エネルギーのすべてを捧げたのだらうと思いました。他方、自分が死んでも、誰も僕のために涙さえ流さないかもしれない気がつきました！そして僕は決めました。「洗礼を受けたい！」

こうして、僕は大学の隣の教会でカテキズムの勉強を始め、それから大学の聖書研究グループに入りました。ドン・ボスコの祝日の3日前、サレジオ青少年運動の静修の日に招待されました。また、教会の助任司祭から、子どもにカテキズムを教えるアシスタントにならないかという誘いがあり、引き受けました。大学では、チャプレンの神父様から朝鮮系中国人移民の若者の家庭教師にならないかと声をかけられ、これも引き受けました。移民の若者たちは、誰も助けてくれる人がいなかったのです。僕はこういったことを全部やりました。それまで決して味わったことのなかった、人に仕える喜びを発見したからです。僕は去年、聖霊降臨の日に洗礼を受け、ヨハネ・ボスコの名前を選びました。この2年間の旅を振り返ると、良き主がどのように導いてくださったか、気づかされます。尊敬をもって、自由を尊重しつつ、一步一步共に歩みながらイエスを告げ知らせてくれた友人たちを通して、主はイエスを知るように導いてくださったのです。この友人たちのおかげで、信仰の小さな炎は大きな光になりました。今、僕もまた、ほかの若者たちとイエスを分かち合いたいと望んでいます！」

2012年サレジオ宣教の日が、私たち皆にとり、いまだイエスを知らない友に、「イエスの物語を語る」促しとなるよう願っています！

Vedran Clement

宣教師顧問
ヴァツラフ・クレメンテ神父

物語を語ることで福音を宣べ伝えることになるとき

福者 ヨハネ・パウロ二世は『アジアにおける教会』で、物語を語ることによって福音を宣べ伝える可能性に注目しました。直接的な宣教は、ほかの宗教を持つ人や信仰を持たない人にとっては、文化への配慮に欠けた、礼儀知らずの一方的な説法のように受け取られることがあります。しかし、イエスの生涯を語ることは、キリスト者の語り部の体験から生まれ、その土地の文化や、友人、隣人の人間関係を背景とします。互いに耳を傾け合い、語り合い、与えそして受け、互いの信仰と理解を深め、豊かにする姿勢に根ざしています。

キリスト者一人ひとり、キリストへの愛とキリストを知らない人びとへの愛に駆り立てられ、イエスの物語と自らのイエスへの信仰について語ります。聴く人を尊重し、押し付けることなく、同時に偉大な語り部である聖霊が扉を開くとき、決して恐れることなく、イエスが救い主であり、人間存在の基本的な問いへの答えであることを告げ知らせます。そのことはまた、キリスト者として説得力のある生活のあかしがあること、自分の心を他者に向けて開き、勇気と尊敬をもって自分の考えを伝えられること、またその必要性を前提とします。そのときはじめて真の友情が生まれ、自分がどのようにイエスと出会ったか、生きることや人間存在の意味について、語る道が開かれます。後は聖霊にゆだねられます。私たちが現れる前から、聖霊は人々の心のうちに働かれるのです！

宣教部門 アルフレッド・マラヴィツァ神父SDB

宣教師たちからもらった信仰をアチュアル族の人々と分かち合いたい



自分の国で、サレジオ会宣教師たちのキリストへの愛を目の当たりにしたことで、私は心が開かれ、海外宣教に派遣されることを願うようになりました。総長は私をエクアドルに派遣してくださり、夢がなかった。

慣れるために、修練期後の養成をその院長の下で一年間受けられるように、管区長は私をキートに送ってくれました。このことを感謝しています。キートでスペイン語のクラスに通うことができ、ポスト・ノビスの会員たちがスペイン語やエクアドルの伝統、文化を学ぶのを助けてくれました。この時期は簡単ではありませんでした。また子どもに逆戻りしたように感じました。しかし、毎週末、若者のグループのアシステンテ(同伴)も経験でき、スペイン語を実地で練習し、キリストの愛を分かち合うだけでなく、何よりも私がやって来る前からすでに神は若者たちの中におられたことを理解する機会になりました。

一年後、私は森林の中の共同体に派遣されました。ワサケンツァはあらゆる場所から遠く離れています。バスも通っておらず、小型飛行機で行くしかありません。そこは国際的な共同体で(アルゼンチン人院長、イタリア人副院長、インドネシア人(私)、エクアドル人ボランティア2人)、アチュアルという先住民族の人々のために働いています。寮のある中学校があり、私は寮のアシステンテをし、学校でも教えました。私たちは、女子生徒の寮を運営するマリア会のシスターたちと協力して働いています。シスターたちも学校で教えます。

アチュアルの人々は独自の言語、伝統、文化、法を持っています。それをすべて覚えるまで、何よりもそこに福音の種が内在していることを受け入れられるまで、時間がかかります。自分たちの仕える人々と同じ生活をするために、私たちはアチュアルの人々と同じものを毎日食べます。バナナ、ユッカ、フィデオです。時々、チチャ(アチュアルの伝統的な飲み物)と一緒にご飯を食べます。

もちろん困難はありますが、個人・共同体の祈りと相互の支えに助けられ、共同の使命のために私は歩み続けることができます。私の国のホセ・カルボネル神父のような宣教師やレイジ・ボッラのようなこの宣教師たちの模範は、自分が受けたイエス・キリストへの信仰を分かち合うよう促すだけでなく、アチュアルの人々の間での困難な宣教の使命を続けるために力づけてくれます。

私たちは神のみ旨を行うためにここにいますと私は確信しています。だから、神はいつも私たちと共におられます。今年、私はグアヤキルで働くことになりました。この国でサレジオ会宣教師として働けることは、私にとってうれしく幸せです。ここエクアドル、神に愛されているこの国で、自分の宣教師の召命が日々成長することを私は願っています！



インドネシア出身、エクアドルの宣教師 **アウグスティヌス・トゴ神学生**

アメリカ大陸の宣教師のための第一回生涯養成コース

キートのサレジオ会生涯養成センターと宣教部門は、2012年8月6日から27日にかけて、アメリカ大陸諸管区のサレジオ会宣教師のための第一回生涯養成コースが開催されることをお知らせします。詳細については、cagliero11@gmail.comへお問い合わせください。申し込みは、2012年4月1日までにお送りください。



サレジオ会の宣教の意向

インド-オリッサ州のキリスト者のために

2007年から2008年にかけて、この地方におけるキリスト者への激しい暴力に苦しんだキリスト者たちが、安心して暮らし、住民同士の尊重と信頼の関係を築くことができますように。

オリッサでキリスト者に対する暴力行為(2007-2008)が起きてからすでに4年がたちました。当時、教会や修道院が略奪され、多くのキリスト者が殉教しました。この地域のすべてのキリスト者のために祈ります。オリッサのムニグダに開設された新たな事業(ハイデラバード管区)は、2012年のサレジオ宣教の日で紹介され、私たちの祈りを特に必要としています。

